

## 外来で治療を継続している乳がん患者の子供への思い

橋爪 可織<sup>1</sup>・西田 望<sup>2</sup>・安倍 祥代<sup>3</sup>・中尾由美子<sup>4</sup>  
月川 弥生<sup>2</sup>・矢野 洋<sup>5</sup>・山之内孝彰<sup>6</sup>・楠葉 洋子<sup>1</sup>・上野 和美<sup>7</sup>

**要 旨** 本研究の目的は、外来で治療を継続しながら子供を養育している乳がん患者の療養生活における「子供への思い」について明らかにすることである。6名の対象者に半構成的面接を行い、収集した語りの内容を質的帰納的に分析した。患者の語りから、『子供たちに心配させたくない』『病気扱いされたくない』『親の責任を果たしたい』『子供への詫び』『自分の経験を活かして欲しい』『子供に支えられている』の6つの子供への思いが抽出された。患者は、母親役割を遂行できていないと感じ、子供に対して詫びる気持ちを抱く一方で、子供の存在が精神的な支えとなっていた。子供を養育している乳がん患者が生活を調整しながら治療を継続していくためには、子供の年代に応じた患者への支援、また子供に対する支援も考慮する必要があると考える。

保健学研究 28 : 29-35, 2016

**Key Words** : 乳がん, 母親, 思い, 質的研究(2015年7月29日受付)  
(2015年9月1日受理)

## I. 緒言

乳がんは比較的予後良好ながんといわれているが、日本において女性の部位別がん罹患率第1位の疾患であり、罹患率、死亡率ともに年々増加している。発症は30歳代から急激に増加し、ピークは40～50歳代である。この時期は家庭や社会で様々な役割を担っており、子供の養育をしながら自分自身の病気と向き合い、治療を受けている患者も多い。がん患者は子供を育てることに多くの時間と労力を費やす中で、母親役割の遂行に挫折感を抱いたり<sup>1)</sup>、母親役割の喪失に対して葛藤と悲嘆を感じている<sup>2)</sup>。また、がんという診断名を子供に伝えることを躊躇したり、自分の感情を抑制してしまう患者<sup>3,4)</sup>も多い。一方茂木ら<sup>5)</sup>の研究によると、18歳以下の子供を持つ術後間もない初発乳がん患者は、乳がんが治癒すると同時に、自分の役割を遂行し自己実現をしていくことや、以前と変わらない普通の生活をしていくという希望を持っていた。また、前田ら<sup>6)</sup>は、乳がんの発病は子供を持つ壮年期女性に母親としてのあり方を熟考させ、母親としての成長を促すとしている。さらに、宇津ら<sup>2)</sup>は、乳がん患者は子供のために頑張ろうと思ひ、子供の姿に励まされており、子供の存在が乳がんを乗り越えるための原

動力として大きく影響していると述べている。このように、子供を持つ乳がん患者に関するこれまでの研究では、患者は様々な悩みを抱えながらも、今までと同じように母親として普通の生活をするを希望し、子供の存在に支えられながら、病気という体験を通して自分自身を成長させていることが明らかになっている。

先行研究の多くは、がん罹患した母親の心理的な変化について焦点を当てたものが多く、外来で治療を継続中の乳がん患者である母親が、子供に対してどのような思いも持っているかについて詳細に明らかにした研究はまだ少ないのが現状である。今後も増え続けるであろう子供を持つ乳がん患者への支援を検討するために、本研究では外来で治療を継続している乳がん患者の療養生活における子供への思いについて明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

## 1. 対象およびデータ収集方法

本研究の対象者は、A病院乳腺内分泌外来に通院中で、告知から3か月以上経過している子育て中(0歳から18歳までの子供を養育している)の乳がん患者であった。

- 1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻
- 2 長崎大学病院
- 3 東京女子医科大学病院
- 4 元長崎大学病院
- 5 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病態解析・制御学講座
- 6 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 移植・消化器外科
- 7 日本赤十字広島看護大学

研究同意が得られた対象者に対して、子供にどのような思いを抱いているかについて半構成的面接を行った。面接はプライバシーが確保できる個室で行った。1回の面接時間は30～60分であり、面接内容は対象者の同意を得てICレコーダーに録音した。調査期間は2011年8月から10月であった。

## 2. 分析方法

ICレコーダーの内容を逐語録に起こし、その中から子供への思いを表現していると考えられる部分を抽出し、意味を損なわないようなコードとした。類似性のあるコードをサブカテゴリーとし、さらに抽象度を上げてカテゴリーとした。分析過程において、信頼性と妥当性を確保するために、カテゴリーが一致しているか研究者間で確認し、その後がん看護を専門とする看護師にスーパーバイズを受けた。

## 3. 倫理的配慮

本研究は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号11071443）。対象者に、研究目的、方法、意義、研究によって生じる可能性のある不利益とその対応、研究参加や中止の自由、プライバシーの保護、研究成果の公表について口頭および文書を用いて説明し、書面にて同意を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象者の概要

対象者は6名であり、年齢はすべて40歳代（平均44.2歳）であった。また、対象者の子供は2～4名で、幼児から20歳以上の成人であった。すべての対象者は乳がん術後であり、面接時は放射線療法、ホルモン療法、分子標的治療のいずれかを継続中であった。診断からの期間は7か月～4年であった（表1）。

### 2. 子供への思いについて

対象者の子供への思いに関連する記述を分析した結果、53のコードが抽出され、21のサブカテゴリー、『子供たちに心配させたくない』『病気扱いされたくない』『親の

責任を果たしたい』『子供への詫び』『自分の経験を活かして欲しい』『子供に支えられている』の6つのカテゴリーに分類された（表2）。以下、カテゴリーを『』、対象者の言葉を「」で示す。

『子供たちに心配させたくない』は、乳がんに罹患したことで、子供が心配したり、外見の変化によって動揺することを考え、子供に対して気遣うことを示していた。子供への病気の説明について、中学生以上の子供に対して「話すのが普通だと思って話しました。ためらいはなかった」、「言わないといけない義務」、「理解してもらっていた方が今後の治療のことも分かるし、協力してもらわないといけないので報告しました」と語り、「極力明るく明るくって思って、大丈夫けんって、取れば大丈夫けんって」と、対象者は病気に対する不安を抱きながらも、子供たちにできるだけ心配させないように配慮していた。また、「小学生でがんと言われて分かるかどうか分からないし、やっぱりかわいそうだと思って言葉を濁した」「下の子に事実を告げるのは私自身抵抗もあったし、心配させたくなかったので、がんという病名は言えなかった」と語るように、子供に心配させたくない気持ちから、幼い子供へは病気について説明していなかった。さらに、抗がん剤の副作用による脱毛により、「目に見えて分かることは心配するやろうね」と、外見の変化に対する子供の反応を気にしていた。

『病気扱いされたくない』は、乳がんに罹患した対象者が、病人として扱われるのではなく、これまで通り母親として接してほしいという思いを示していた。乳がんの罹患によって治療を続けなければならない一方で、自分自身のこれまでの生活や役割を保ちたいという思いがあり、「病気と思われたくない」、「病気やけんって接してもらいたくない」と言い、これまで通りに普通に接してほしいと願っていた。

『親の責任を果たしたい』は、子供に対して母親としての責任を果たすこと、また子供への経済的な支援をするという親としての責任を果たしたいという思いを示していた。対象者は、「これから子供たちともっと真剣に向き合いたい」、「下の子たちが成人するまでは生きていたいなって、どんなことしても」、「仕事を続け親として

表1. 対象者の概要

	年齢 (歳)	現在の治療	子供	診断からの期間
A	46歳	分子標的治療	20歳代, 20歳代, 中学生	7か月
B	43歳	ホルモン療法	高校生, 中学生, 小学生	2年
C	45歳	ホルモン療法	高校生, 高校生, 中学生	3年
D	40歳	分子標的治療	10代後半, 幼児, 幼児	1年半
E	44歳	放射線療法	高校生, 中学生	1年半
F	47歳	分子標的治療 ホルモン療法	大学生, 高校生	4年

表2. 子供への思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子供たちに心配させたくない	心配させてしまうような目に見える変化	脱毛とか目に見えてわかることは心配する
	心配させたくないで病名は言えない	一番下の子には心配させたくなかったの、がんという病名は言えなかった
	できるだけ明るく大丈夫だと話す	心配かけたくないっていう気持ちがある 子供が小さいから落ち込むかもしれないので明るく接している
病気扱いされたくない	病気と思われたくない	病気と思われたくない
	病人として接してほしくない	病気やけんって接してもらいたくない
親の責任を果たしたい	経済的な親の務めを果たしたい	金銭的な面での親の務めを果たしたい 仕事をつづけ親としての責任を果たしたい
	どんなことをしても生きたい	下の子たちが成人するまではどんなことをしても生きていきたい
	もっと子供と向き合いたい	これから子供たちともっと真剣に向き合いたい
	子供のために頑張りたい	子供のために頑張らなきゃいけない 一生懸命子供たちをかわいがって育てていきたい
子供への詫び	申し訳ないという思い	申し訳ないっていう思いと、お母さん大丈夫よっていう思い
	世話ができないことへの申し訳なさ	受験と治療が重なり十分なサポートがしてあげられなかった ほったらかしにしてしまって、かわいそかった
	子供が思いを閉じ込めている	子供は誰にも話せず、内面に閉じ込めてしまっている 私の前では頑張ってる強がっていたが、結構我慢していたみたい
	死ぬかもしれない病気	子供をずっと見てあげられるか この先どれくらい生きられるか
自分の経験を活かして欲しい	検診を勧める	あなたたちは早く検診受けてねって言う
	身体を気遣うことを伝える	若い時にもがんになる可能性はあるし、身体にも注意するようにということ強く伝えた
子供に支えられている	普通のことに助けられる	子供がいると元気になれる 一緒に笑ったり喋ったり、笑顔が出たり、遊んだりというのすごく助けられている
	子供がいるとくよくよできない	子供がいるからそんなくよくよしてても
	精神的に支えられる	なかなか一人では乗り越えられない病気なんだなっていうのがわかった
		子供が大丈夫と言ってくれる 子供たちがいることで精神的な支えはすごく大きい
	いざというときに頼りになってほしい	いざというときに頼りになってくれればいい
	家族のやさしさ	心配してくれているのはありがたい 家族がすごく優しくなった
		家族がいてよかった 夫と子供たちが茶碗洗いとか当番を決めて頑張ってくれている

の経済的な役割を果たしたい」と語っていた。

『子供への詫び』は、治療や入院のため、母親としての役割が果たせなかったことや、子供を残して死ぬかもしれないという思いから、子供に対して申し訳ないという気持ちを示していた。対象者は、入院や治療により、「ほったらかしにしてしまってかわいそかった」と言い、「(子供に対して) 当たり前でできると思っていたことが本当にできるのか」、「子供をずっと見てあげられるか」と将来に対する不安や「早く死んじゃったらごめ

んね」という子供への詫びる気持ちを語った。また、このカテゴリーは、対象者が乳がん罹患したことで生じている子供の心理的な変化への心配も示していた。対象者は、「(娘は) 私の前では頑張ってる強がっていたが、結構我慢していたみたいで、学校ではそれが(態度に)出ていると思う」と語り、自分の病気が子供に与える影響を考え、申し訳なさを感じていた。

『自分の経験を活かして欲しい』は、自分が乳がん

罹患して経験した不安や苦痛から、子供たちには自分と同じような経験をしてほしくないと感じ、乳がんを罹患してしまった対象者自身の体験を子供に活かして欲しいという思いを示していた。比較的小児の年齢が高い対象者は、「若い時にもがんになる可能性はあるし、身体にも注意するようにと強く伝えた」、「あなたたちは絶対検診を受けてねって言った」と語った。

『子供に支えられている』は、子供と一緒に過ごすことや子供からの励ましによって、前向きな気持ちが生まれ、精神的に支えられていることを示していた。再発や転移への不安や死への恐怖など様々な不安を抱えている中で、「精神的には逆にすごく支えられている」、「子供がいると元気になれる」、「この子供たちのためにがんばらなければならない」と語り、子供の存在が大きな支えとなっていた。また、母親が病気になることで子供たちは手伝いをするようになり、子供たちの優しさに対象者は感謝していた。さらに、対象者は病気になったことで「家族がすごく優しくなった」、「子供たちが（自分も）しっかりしなければならないという思いを持ってきているみたい」と語り、家族の絆が深まったと感じていた。

#### IV. 考察

乳がんは進行が遅く、10年を経過しても再発や転移を起こす可能性があり、乳がん患者は常に再発・転移への恐怖、死への不安と隣り合わせの生活を送っている<sup>7)</sup>ことが考えられる。本研究では、子供を持つ乳がん患者は、自分自身の身体に対する不安だけでなく、子供への申し訳なさや自分の病気が子供に与える影響にも思いを巡らせていたが、これまでと変わらない母親であることを強く望み、子供のために生きることを苦難の中での生きる原動力としていることが明らかになった。

自分自身の不安と同じように、子供たちも病気や治療に伴う母親の変化、将来への不安を抱くと考え、患者は『子供たちに心配させたくない』という思いを抱き、少しでも子供の不安を軽減するように明るく振る舞うなど、これまで以上に自分自身の態度に注意を払っていた。塚越ら<sup>3)</sup>は、患者が家族に配慮して衝撃・悲嘆の感情を抑制して普通に振る舞うことにより、家族からは患者が危機状態にあることがわかりにくくなり、患者は家族から情緒的サポートが得られなくなると述べている。母親ががんであることを知る中学生以上の子供は母親が死ぬことへの不安や混乱を経験しており<sup>8,9)</sup>、母親は子供に更なる不安を抱かせないようにしようとして自分自身の気持ちを抑制してしまうかもしれない。また、子供たちに母親の気持ちの変化を察知させないようにしようと普段通りの母親の姿を見せようとするかもしれない。Coyneら<sup>10)</sup>は乳がんであることと母親でいることの複雑な相互作用は女性に大きなストレスと感情的な苦しみをもたらすと述べているが、患者は乳がんを罹患する前の“母

親像”をできるだけ壊さないように振る舞い、そのことで誰にも打ち明けられない思いを持っていることが考えられる。

また一方で、乳がんを罹患し病者という役割を持つことになっても、『病気扱いされたくない』という思いを持っていた。乳がん患者というレッテルを貼られることは、常に病気や死への不安と対峙しなければならないことであり、時にそれは母親という役割を放棄しなければならないことを意味する。子供が自分を病者としてではなく、これまで通り母親として接してくれることは、乳がんという病気や死への不安を払拭させてくれることでもある。子供を持つ乳がん患者は、自分自身の日常生活や母親としての役割を継続することを望み、また子供の日常生活の崩壊を最小限にすることを望んでいる<sup>11)</sup>。複雑で長期にわたる乳がん治療の中で、治療に専念するだけでなく、診断前の日常生活を維持し、また母親であることを維持できるような支援が重要であると考えられる。

『親の責任を果たしたい』は、子供を育てるという責任や子供への経済的な責任を果たすことであり、乳がんへの罹患によりその責任を果たせないかもしれないという不安から生じる思いであった。18歳以下の子供たちには精神的にも、経済的にもまだまだ親の支援が必要であり、親として子供を不自由なく育てたいという願いは母親として当然の思いである。子供を持つ母親の精神健康に関する研究<sup>12)</sup>において、何らかの理由により子育てに十分な時間を割けないことが、就学前の子供を持つ母親の不安を高めていた。乳がんを罹患することは、子供と過ごす時間の減少につながり、そのことで子供に不自由な思いをさせるかもしれないという不安が生じており、その不安の反動として、これまで以上に親としての責任を実感していると考えられる。一方で乳幼児がいる母親はいない母親と比較し、心配が大きく、また子供を叱ることが多くなったという報告<sup>2)</sup>もあり、特に幼い子供をもつ患者の場合、身体的、精神的に過重な負担がかかっているかをアセスメントし、支援する必要があると考えられる。

これまで当たり前のこととして過ごしてきた生活が、乳がんの罹患により一変し、自分自身の入院や治療のため、子供の生活までも変えてしまったことに対して患者は『子供への詫び』を感じていた。病気や予後に対する不安から、これまでと同じように子供の養育ができるか、子供が自分を必要とする時に生きていられるかという将来に対する不安が生じていた。さらに、子供自身が不安を抱えていたり、我慢しながら生活しているのではないかと考えながら過ごしていた。実際、先行研究において、乳がんを診断された母親をもつ13～19歳の子供たちは集中力が低下すること<sup>13)</sup>や、8～16歳の子供は社会的に繊細で、孤立していること<sup>14)</sup>、内向的な行動をとるリスクがあること<sup>15)</sup>が報告されており、乳がんという病気は患者だけでなく家族、特に子供たちにも大きな影響をもたらす。対象者は子供の心理面を心配し、「誰

にも打ち明けられない部分をフォローできる場があればいい」と“子供が思いを表出できる場”の必要性を感じていた。患者だけでなく、気持の表出がうまくできない子供に対してのケアにも目を向けることで患者が安心して治療を継続することにもつながると考える。

また、子供に『自分の経験を生かして欲しい』と考え、子供自身が身体を気遣うきっかけにしてほしいと願っていた。乳がんの発症には遺伝的な要因もあることから、患者は将来子供も自分と同じように乳がん罹患するかもしれないという不安や、罪悪感を感じている可能性がある。しかし、患者は自分の経験を子供と共有しようとする前向きな思いもあり、遺伝に関する正しい情報を提供すること<sup>2)</sup>や、子供が乳がんに対する関心を高められるような支援も必要である。

母親にとって、子供の存在は病気や治療、死に対する不安や恐怖を乗り越え、対象者の前向きな気持ちを後押しする原動力となっていた。子供を持つ母親は子供のためにどうしても生きたいという強い願望と闘志を抱いて前向きに生きていこうとする<sup>16)</sup>。子供がいることで、自分は生きていかなければならない存在であることを実感し、つらい治療を受けても生きようとする意志を強めていたと考えられる。また、子供が人を気遣う優しさを持つようになったと実感しており、家族全体がお互いを思いやる気持ちを持って支え合い、家族の絆を深めることにつながっていた。本研究において子供たちは母親の乳がん体験の中で精神的に成長し、母親を支えていることが明らかになった。がんの経験は子供とのつながりをより強くさせる<sup>17,18)</sup>。子供に病名を告げられない患者も多いが、がんであることを告げるにより病気についても子供と語り合うことができ、そのことはお互いの大切さを再認識させ、母親と子供の双方にとっての成長につながっていくと考えられる。そのため、子供の年代や状況に応じて、病気や母親の状況をいかにして子供に伝えていくかを患者とともに考え、母親の問題を家族が共有できるように支援していく必要がある。

## V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は1施設での調査であり、対象者数も少なく、その年代にも偏りがあるため、母親である乳がん患者の子供への思いが十分明らかになったとは言いがたい。また、対象者の子供の年代は幼児から20歳以上の成人と幅広く、どの年代の子供への思いであったかを明確にすることはできなかった。今後は対象者数を増やし、様々な年代の乳がん患者を対象とすることで、母親である乳がん患者の子供への思いを一般化することをめざし、さらに子供の年代や性別に応じた具体的な支援を検討していく必要がある。

## VI. 結論

外来で治療を継続しながら子供を養育している乳がん

患者6名に対して、「子供への思い」について半構成的面接を行った。患者の語りから、『子供たちに心配させたくない』『病気扱いされたくない』『親の責任を果たしたい』『子供への詫び』『自分の経験を活かして欲しい』『子供に支えられている』の6つの子供への思いが抽出された。患者は、母親役割を遂行できていないと感じ、子供に対して詫びる気持ちを抱く一方で、子供の存在が精神的な支えとなっていた。子供を養育している乳がん患者が生活を調整しながら治療を継続していくためには、子供の年代に応じた患者への支援、また子供に対する支援も考慮する必要があると考える。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様、関係施設のスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は第27回日本がん看護学会学術集会で発表された。

## 引用文献

- 1) 近藤真紀子, 佐藤禮子: 未成年の子どもを持ちがん罹患で死を意識する壮年期女性の抱く挫折感. 臨床死生学, 16: 90-101, 2011.
- 2) 宇津千晴, 国府浩子: 乳がん患者がもつ母親としての子どもへの思いと関連する要因. がん看護, 7: 511-517, 2012.
- 3) 越塚君江, 神田清子, 藤野文代: 女性生殖器がん患者の家族への思いとそれに対する看護援助. 岡山大学医学部保健学科紀要, 16: 31-38, 2005.
- 4) Jacqueline B, Leanda K, Olive B, Joanna L, Alison J, Alan S: Qualitative interview study of communication between parents and children about maternal breast cancer. BMJ, 321: 479-482, 2000.
- 5) 茂木寿江, 大山ちあき, 藤野文代, 神田清子: 子供を持つ乳がん患者が抱く希望. Kitakanto Med J, 60: 235-241, 2010.
- 6) 前田真紀子, 佐藤禮子: 子供を持つ壮年期女性の乳癌発病後の役割意識の変化. 岡大医短紀要, 7: 189-199, 1996.
- 7) 妹尾未妃: 中年期乳がん患者の乳がん罹患後の人生の希望と不安—家族や同病者, 重要他者からのサポートとの関連について—. 母性衛生, 50: 334-342, 2009.
- 8) Zahlis E: The child's worries about the mother's breast cancer: Sources of distress in school-age children. Oncol Nurs Forum, 28: 1019-1025, 2001.
- 9) Spira M, Kenemore E: Adolescent daughters of mothers with breast cancer: Impact and implications. Clinical Social Work Journal, 28: 183-195, 2000.

- 10) Coyne E, Borbasi S: Holding it all together: Breast cancer and its impact on life for younger women. *Contemporary Nurse*, 23: 157-169, 2006.
- 11) Billhult A, Segesten K: Strength of motherhood: nonrecurrent breast cancer as experienced by mothers with dependent children. *Scand J Caring*, 17: 122-8, 2003.
- 12) 吉井清子：中年期既婚女性における就労・社会参加・家庭内役割の精神健康への影響と家族要因の調整効果. *日本福祉大学社会福祉論集*, 110 : 105-128, 2004.
- 13) Clemmens DA: The significance of motherhood for adolescents whose mothers have breast cancer. *Oncol Nurs Forum*, 36: 571-577, 2009.
- 14) Vannatta K, Grollman JA, Noll RB, Gerhardt CA: Impact of maternal breast cancer on the peer interactions of children at school. *Psycho-Oncol*, 7: 252-9, 2008.
- 15) Vannatta K, Ramsey RR, Noll RB, Gerhardt CA: Associations of child adjustment with parent and family functioning: comparison of families of women with and without breast cancer. *J Dev Behav Pediatr*, 31: 9-16, 2010.
- 16) 浜 治世：母性感情が子どもをもつ若い女性癌患者の再発と死の不安克服に及ぼす効果に関する研究. *文京女子大学研究紀要*, 2 : 101-125, 2000.
- 17) Bekteshi V, Kayser K: When a mother has cancer: pathways to relational growth for mothers and daughters coping with cancer. *Psycho-Oncol*, 22: 2379-2385, 2013.
- 18) Lindqvist B, Schmitt F, Santalahti P, Romer G, Piha J: Factors associated with the mental health of adolescents when a parent has cancer. *Scand J Psychol*, 48: 345-351, 2007.

## The breast cancer patient's concerns of their children as a mother

Kaori HASHIZUME<sup>1</sup>, Nozomi NISHIDA<sup>2</sup>, Sachiyo ABE<sup>3</sup>, Yumiko NAKAO<sup>4</sup>

Yayoi TSUKIGAWA<sup>2</sup>, Hiroshi YANO<sup>5</sup>, Kosho YAMANOUCI<sup>6</sup>, Yoko KUSUBA<sup>1</sup>, Kazumi UENO<sup>7</sup>

- 1 Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences
- 2 Nagasaki University Hospital
- 3 Tokyo Women's Medical University Hospital
- 4 Former Nagasaki University Hospital
- 5 Department of Translational Medical Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences
- 6 Department of Surgery, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences
- 7 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

Received 29 July 2015

Accepted 1 September 2015

**Abstract** The purpose of this study was to explore the concerns of breast cancer patients as a mother. Data was collected through semi-constitutive interviews with six mothers with breast cancer and analyzed based on the qualitative deductive method. Data analysis revealed six categories of feelings: "not wanting to worry their children"; "not wanting to be treated like a sick mother"; "wanting to fulfill the responsibility as a mother"; "wanting to apologize to their children"; "wanting their children to learn from their mother's experience of cancer"; and "being supported by children". While the patients felt apologetic to their children for they felt they were not able to fulfil their role as a mother, the presence of children had been a spiritual support. For breast cancer patients with children who need to adjust their life whilst continuing treatment, nurses are suggested to consider the patient's children's age when providing support, and also consider support for the patient's children.

Health Science Research 28 : 29-35, 2016

**Key words** : Breast Cancer, Mother, Concern, Qualitative research